

日本における経営診断学の源流を求めて

— 平井泰太郎の研究 —

齊藤保昭*

はじめに

三戸公は、日本の経営学を築いた人々を回顧するにあたり、「日本の経営学を築いた人々、彼等は欧米の経営学を日本の現実に立って学び問ひ、自らの学を構築した。彼等は現在の現実に立っている我々に何を語りかけるか。そして、我々は彼等の言にどれ程耳を傾け、彼等の言を理解し、意味を付与することができるであろうか」と述べている^(注1)。日本の経営学の創設期の代表的研究者の一人に平井泰太郎がいる。平井について、古林喜楽は、「日本の経営学を語るには、平井泰太郎博士の名が必ず出てくるし、平井泰太郎先生を語るには、必ず経営学をもって始めなければならない。ことほどかように、平井先生と経営学とは、切っても切れない関係にある」と述べている^(注2)。平井泰太郎は、また、日本経営診断学会の初代会長でもあり、わが国において経営診断学を提唱した最初の学者でもあった。1968年1月に日本経営診断学会が創設されてから45年が経過した。筆者も2010年10月より理事を務めさせていただいている。平井は現在の現実に立っている我々に何を語りかけるか。そして、我々は平井の言にどれ程耳を傾け、理解し、意味を付与することができるであろうか。これが本論文の目的である。

I 平井泰太郎（1896～1970）の略歴と主要著作

では、平井泰太郎とは、どのような研究者であったのだろうか。ここで、略歴と主要著作について、概観することで、その概要をつかむこととする^(注3)。

まず、平井泰太郎（1896～1970）の略歴であるが、以下の通りである。

1896年（明治29年）10月15日 出生。

1918年（大正7年）3月 神戸高等商業学校卒業。

*コミュニティ政策学部 准教授

- 1920年(大正9年)5月 東京高等商業学校専攻部商工経営科卒業(商学士)。この間、上田貞次郎教授の研究室において指導を受けた。卒業論文は、「企業評価論上の一考察」
- 1920年(大正9年)5月 神戸高等商業学校講師。
- 1921年(大正10年)4月 会計学商学研究のため、イギリス・ドイツ・アメリカ合衆国へ留学。のちにイタリアを追加。1925年(大正14年)末帰国。
- 1923年(大正12年)11月 神戸高等商業学校教授(ドイツ留学中)。
- 1926年(大正15年)7月 日本経営学会創立に参加(1946年(昭和21年)10月日本経営学会理事長就任)。
- 1929年(昭和4年) 神戸商業大学附属商業専門部教授兼神戸商業大学助教授。
- 1931年(昭和6年) 神戸商業大学教授。
- 1937年(昭和12年)6月 再度、欧米に出張(翌年5月まで)。
- 1944年(昭和19年)2月 神戸商業大学経営計録講習所長。
- 1944年(昭和19年)8月 神戸商業大学経営機械化研究所長。
- 1944年(昭和19年)10月 神戸経済大学教授。
- 1946年(昭和21年)10月 神戸経済大学附属経営学専門部長。
- 1948年(昭和23年)12月 日本学術会議会員(第1回)。以後5期にわたって同会員の職にあり、その間、経営学研究連絡委員会委員長(1952年(昭和27年))、国際交流委員会委員長(1959年(昭和34年))。
- 1949年(昭和24年)5月 神戸大学教授。この時日本において初めて経営学部が成立。
- 1951年(昭和26年)9月 学位論文「優秀生産及び適正配給を目的とする統制管理技術及び売買組織改善の研究」により、神戸大学神戸経済大学より経営学博士の学位を授与される。日本最初の経営学博士。
- 1953年(昭和28年)6月 神戸大学大学院経営学研究科長。
- 1956年(昭和31年)4月 神戸大学経営学部長。
- 1957年(昭和32年)6月 パリ市参事会議長名にて、アミ・ド・パリの称号を贈られる。
- 1958年(昭和33年)4月 神戸大学神戸経済大学研究科長。
- 1960年(昭和35年)3月 神戸大学を定年退官。同年4月 神戸大学名誉教授。
- 1961年(昭和36年)6月 国際経営会議(CIOS, Academy of Management)のフェローに日本人として初めて列せられる。
- 1965年(昭和40年)4月 藍綬褒章。
- 1967年(昭和42年)4月 立正大学経営学部教授。
- 1968年(昭和43年)4月 日本経営診断学会創立に参加、初代理事長に就任。
- 1968年(昭和43年)6月 ドイツ経営学会名誉会員に推薦される。これも日本人の経営学

者としては最初の名誉であった。

1968年（昭和43年）11月 兵庫県文化賞受賞。

1969年（昭和44年）11月 勲二等瑞宝章。

1970年（昭和45年）7月2日 夕4時55分 胆嚢炎・肺炎併発のため逝去。（享年73歳）

以上が略歴であるが、日本経営学会創立への参加、神戸大学に日本で最初の経営学部の創設、日本で最初の経営学博士等日本における経営学の発展に大きな足跡を残したことが理解できる。

次に、著作であるが、以下の通りである。

【主要著作】

『経営学入門』千倉書房，1932年（昭和7年）。

『産業合理化図録』春陽堂，1932年（昭和7年）。

『経営学文献解説』千倉書房，1932年（昭和7年）。

『経営学の常識』千倉書房，1932年（昭和7年）。

『経営学通論』千倉書房，1935年（昭和10年）。

『アシュレイ経営学概説』同文館，1936年（昭和11年）。

『販売組織の更改と経営機構』巖松堂書店，1938年（昭和13年）。

『経済統制の底流－優秀生産及び適正配給を目的とする統制管理技術及び売買組織改善の研究－』東洋経済新報社，1951年（昭和26年）。

【主要論文を編集したもの】

神戸大学経営学研究室『平井泰太郎経営学論集』千倉書房，1972年（昭和47年）。

【経営診断関係】

平井泰太郎編『経営コンサルタント』東洋書館，1952年（昭和27年）。

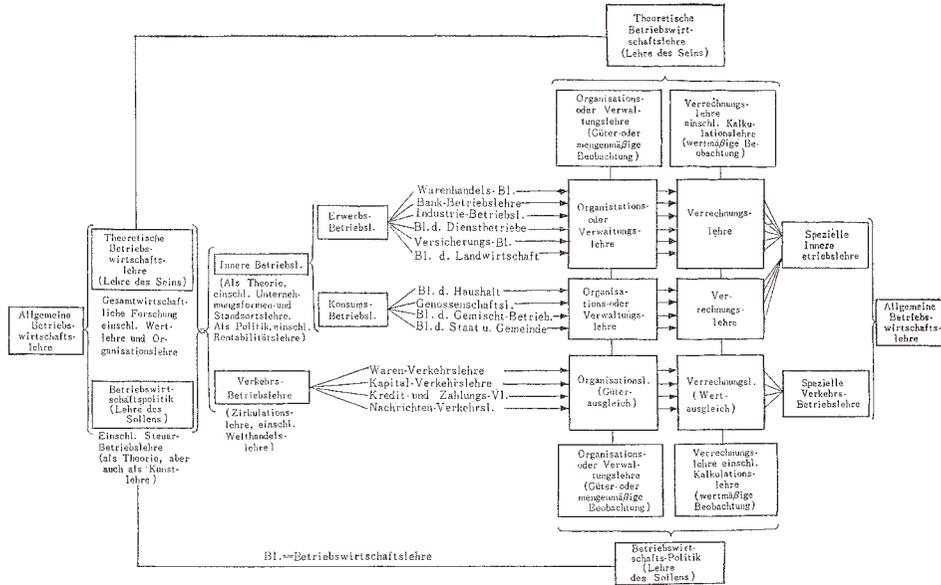
平井泰太郎・清水晶編『経営診断』青林書院，1960年（昭和35年）。

以上が、主要著作であるが、その他、1952年（昭和27年）に日本最初の『経営学辞典』をダイヤモンド社から編集、発行している点が特質される。

II 平井経営学説について

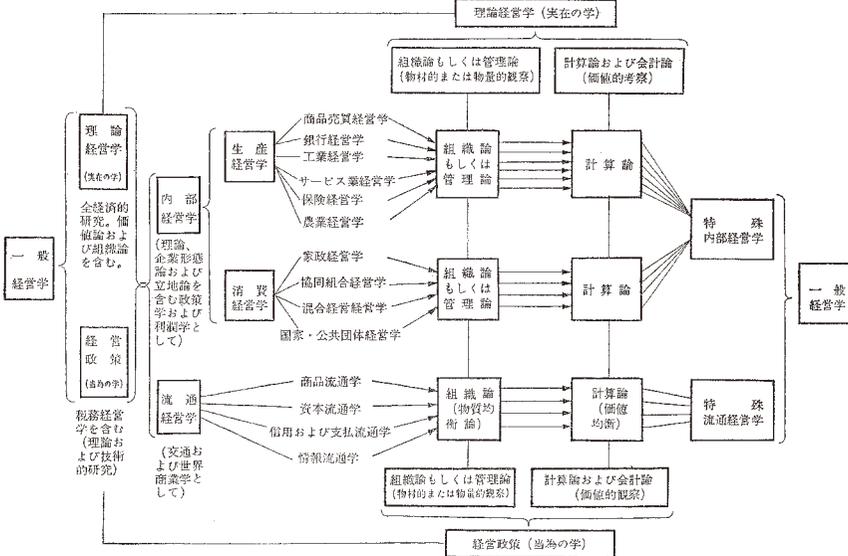
次に平井泰太郎の学説について論じることとする。平井泰太郎は、1925年にベルリンで出版された『経営学泉書』（Y. Hirai und A. Isaac: Quellenbuch der Betriebswirtschaftslehre, Berlin, 1925.S.13～14.）において図表1のような経営学体系を提示した^(注4)。縦軸に経営学の対象

平井初期の経営学体系 (Quellenbuch, 1925年版)



資料: Y. Hirni und A. Isanc; Quellenbuch der Betriebswirtschaftslehre, Berlin, 1925. S. 13~14

平井初期の経営学体系 (『経営学泉書』1925年版)



資料: Y. ヒライ, A. イサーク『経営学泉書』ベルリン, 1925年版, 13~14ページ

図表 1

(出所) 平井泰太郎編『経営学事典』青林書院新社, 1964年, 15ページ。

領域として「一般経営学」を「理論経営学（実在の学）」と「経営政策（当為の学）」とに分け、さらに、内部経営学と流通経営学に分け、内部経営学を生産経営学と消費経営学に分けた。このように特に生産経営学に限定せず消費経営学まで対象を拡げた点が平井経営学の大きな特徴であった。さらに、以上のような対象を横断する形で経営学の内容として「組織論もしくは管理論（物材的または物量的観察）」と「計算論および会計論（価値的考察）」が交差し、したがって、内部経営学と流通経営学のそれぞれの分野に「組織論もしくは管理論（物材的または物量的観察）」と「計算論および会計論（価値的考察）」があるとした。そして、最後に業務や職能による特殊研究の分野である「特殊内部経営学」と「特殊流通経営学」を配置した。平井は、この体系について「第1版は1925年ベルリンの出版であるが、『経営学泉書』を編んだときに、そのシェーマのなかに、管理論と会計論、ならびに内部経営論と渉外交通関係を掲げ、また、営利経済のみでなく、経営学の対象として消費経済、ことに家政学・組合経営学と相並んで、公共団体経営論を体系づけたのであるが、この試みは、若輩の大胆なる記述であったが、当時の欧州諸国において、若干の支持者をも得たのである」と述べている^(注5)。以後、平井は、この『経営学泉書』に示された経営学の体系を「たえず念頭に置きながら、その一分野に自らの研究を限定することなく、可能なかぎり経営学全分野の問題に取り組もうとした」のである^(注6)。これは、平井の没後、1972年に刊行された神戸大学経営学研究室編『平井泰太郎経営学論集』（千倉書房刊）に収録された「経営学の方法」に関する論文8点と「経営の職能と構造」に関する論文8点と「経営と会計」に関する論文9点からも非常に広い分野にわたっていることが窺い知れる。

では、もう少し詳しく、平井泰太郎の経営学説について論じることとする。古林ら（1971）は、日本の創世記における9名の経営学者の学説を以下のように副題を付けて紹介している^(注7)。

- ①上田貞次郎－経営学の肯定説と否定説、②増地庸治郎－その学的本質の功罪、③平井泰太郎－単位的個別経済説の構想、④馬場啓治－理論的研究と認識対象、⑤中西寅雄－個別資本説の創始と経営技術学、⑥北川宗蔵－その経営学方法論の特徴、⑦佐々木吉郎－経営経済学史研究と「二重性論」の展開、⑧池内信行－社会科学としての経営経済学への道、⑨大木秀男－経営技術学の提唱とその展開

これによると平井泰太郎の日本経営学史上の位置付けとしては、経営は経済単位一般（家政・企業・官庁など）であり、経営学の対象は一般的な個別経済（家政経済、企業・非企業を含む事業経済および官庁経済など）であるとした単位的個別経済説ということが出来るが、主著ともいべき『経営学入門』よりその主要論点について抜き出してみると次のようになる^(注8)。

① 経済学と経営学について

- ・「経済学が、総合経済的な流通交換の側面に発達し、個別経済的な側面が経営学に於いて取り扱はれるに至った」(p.135)

② 経営という言葉について

- ・「元来経営と言う言葉は『経営する』と言ふ動詞から出来上がって来た事は疑がない」(p.136)
- ・「『経営する』という事を考へて見ると其處には三つの要件が當然に考へられる。其一は『経営する者』即『経営者』其二は『経営する事の全般的目標』即ち『到達點』其三は『経営する事の爲に要する行動の統一的繼續』此の三つである」(p.136-137)
- ・「『経営する』と言ふ事は、-中略-一定の統一的意思を前提として目標に適うが為の、秩序ある行動のとられて居る事の全般が期待せられるのである」(p.138)
- ・「経営は、「統一性と継続性とを有する組織の存在に依って成り立つのである」(p.140)
- ・「個々の行動が統一的意思を前提として全般的目的に適ふが為に行われて居る事を全体的に理解することによって、始めて経営すると言ふ言葉の意味を生じるのである」(p.143)
- ・「経営すると言ふ事と行動すると言ふ事とは同意義ではない」(pp.140-141)
- ・「個々の行動が結合せられ継続せられ統一せられたる形に於いて把握せられる事に於いてのみ経営たる事の意味を生じ得るのである」(p.143)

③ 経営学における価値について

- ・「経営学において取扱う価値は、一般社会経済を前提とする客観価値ではない。特定の個人-例へば特定の経営者を前提とする主観価値ではない。然し乍ら、一定の群、若しくは類に属する経営経済の経営体の立場よりする特殊主観価値である。故に若しこれを名づくべくんば『経営価値』と称し得べきものである」(p.305)

④ 経営学の研究対象について

- ・「経済生活を観察するのに組織としての経営を通じてこれを考察すると言ふことは便宜にも適ひ、必要にも適うと言ふ事に考へられるのである。此の単位こそ経営もしくは経営経済であり、経営若しくは経営経済の機構を通じて人間の経済生活を明らかに潜とする事こそ経営学或いは経営経済学と呼ばれるものの成立する所以であるのである。」(p.156)
- ・「経営は其の根底に於て人と人との経済的結合になるものであること。而して、人は必ずしも一つの経営の中のみ其の全生活を没入するものでないこと。併し、個々の経営は、人々の特定の経済上の目的が達成せらるる為に存在すること。而して個々人が、其

の特定の目的の為の経済行為の有意的、統一的にして、且つ継続的な組織を構成して居る其総体を指稱するのであると言ふ事を忘れては意味をなさない事になり終わるのである。此の事を自得して、個々の経営体を中心に人間経済生活を研究する事こそ経営学の研究方法の特徴を為すものである」(pp.161-162)

- ・「経営学は経営を対象とする。而して、茲に意味せらるる経営と言ふのは経済単位一般を言ふのである」(p.162)
- ・「経営学の対象は一般的な個別経済である」(p.186)
- ・「個別経済は主体を持ち、意思を持ち、計画を持つ『合計画性』はその本質である。個別経済は一定の目的を以て経済せられつつある『合目的性』が其の特質となるに何の疑があらう。個別経済は、一定の財産を持ち、従って会計を持ち、予算を有する『合計画性』は其の特質でなくして何であらう」(p.281)
- ・「経営学は個別経済を対象とする。但し個別経済を対象とする学問は経営学のみではない。経営学が個別経済を対象とするのは、経験対象として之を取扱ふのではない。認識対象として個別経済を之を取り扱ふのである。即ち個別経済を取り扱ふに就て、一定の観点より之を取り扱ふのである。此の観点と云う意味を、往々利益代表と誤解する人があるが、此の点も然うではない事が理解せられ得たと思ふ。此の観点こそ経営学の学問としての立脚点を為すものであり、而かも其の見方は、個別経済を取り扱ふ事より、当然に起り来った事である」(p.323)
- ・「経営学は、営利経済を対象とするのみでなく、又生産経済を対象とするに留らずして、一般的に個別経済を対象とせざるを得ざるに至ったのである」(p.356)
- ・「経済学に於いては、流通経済の機構を説明せんが為めに、其の経済活動の単位としての個別経済を問題とするに反して、経営学に於いては個別経済が其の主体の意思と計画とに基き、合目的経済活動を営みつつある側面を捉へるのである」(p.357)

⑤ 経営学的考察について

- ・「個別経済の研究に即して、全経済生活を明にする事こそ経営学的考察を生む所以であると思ふのである」(p.234)
- ・「経営学は、「全一体としての経営経済を問題とするのである。個別経済を全一体として観察するのである」(p.261)
- ・「経営学的考察の正しき把握は、之が計算的に行はる場合に於て始めて其の意義を生じ来るのである。経営経済における最終の判断は、経済価値の計算的把握において認識せらるるものである」(p.286)
- ・「経営学的考察による全経済生活の再検討が、矛盾なく一貫せる研究を為し擧ぐるに

至ったものであるのである」(p.362)

以上が、平井泰太郎の学説であるが、山本(1977)も指摘したように、われわれの言葉で「経営」を考え、広く経営の事実に迫り、これを革新し超克せんとし、対象を方法の及ぶ限り拡大していた、つまり、経営経済を経済性や合理性によって生産経済に限定する立場には満足できず、むしろこれを批判しこれを越えて経営学的に考察の対象たる個別経済、単位経済をすべてを経営学の対象とみたのである^(注9)。

Ⅲ 平井泰太郎の経営診断学について

平井泰太郎の晩年の研究に、「経営診断学」の研究がある。平井(1960)において経営学の性格を「経営学者学」「経営者学」「経営診断学」の三つの観点に分け、その一つに経営診断学を位置づけた^(注10)。経営学者学とは、「諸経営の生態、構造および諸経営間の経営機構を糾明する理論および政策としての経営学である。後の二者に対して、経営学者学などという表現を用いて、これを表わすことがある」(p.1)と述べているが、これは、平井の経営学体系からみると理論経営学と経営政策からなる一般経営学の研究を指すものと考ええる。次に、経営者学とは、「現場を担当する経営者の知識および教養としての経営者学である。その性格は、他の表現を用うれば、経営管理学と称することもできる。経営学の教える理論および政策の現場における適用あるいは応用を目途する、経営方法、換言すれば管理・運営方法の学である。」(p.1)と述べているが、これは、平井の経営学体系からみると組織論もしくは管理論の研究を指すものと考ええる。最後に経営診断学とは、「経営診断学と呼ばれるべきものである。経営診断そのものについては後に扱うのであるが、これを比喩的に例証すれば、医学の領域において、これに先行する生理学、化学、物理学等の一般科学を前提として、病理学などの一般基礎理論を生じ、現場の学問として臨床医学あるいは診断学の領域が重要なものとして発達しておる。いうまでもなく、医学において診断学(diagnosis, Diagnostic)という称呼が成立しておるのである。また、経営学の一部と考えることができるのであるが、会計学の領域において、一般会計理論より進んで、原価計算、経営分析および比較、管理会計、予算統制等の専門部門の発達がある。これとともに他方、監査理論、監査技術、その面よりするコントローラ学があるようなものである」(p.1)と述べ、経営診断学は、医学における臨床医学と同列としている。また、「場所と、業界と、関係者の如何とによって、移り行く姿、modifyせられる姿、それこそ個別性と特殊性と歴史性とを考慮しつつ、適用と応用とを考えなければならぬのである」(p.8)と述べ、経営診断においては、個別性、特殊性、歴史性を考慮する事の重要性を指摘している。経営診断学は、平井の経営学体系からみると価値的考察と考える。

以上が、平井泰太郎の経営診断学についての考え方であるが、三上（1992）も指摘しているように、いち早く経営診断学の成立を提唱されたのは偉大な卓見であったが、それが独自の学として成立するための方法論の確立までは、なされていなかった^(注11)。ただ、平井は、1960年に弟子の清水晶と編んだ『経営診断』（青林書院刊）の序文において、「経営診断は、将来速やかに育成を図ることを要する大事な分野である。もちろん、この書はいまだ十二分のものではない。問題の所在を示した程度のものであると思う。しかし、これがまた1つの礎石となって、近き将来の大成を期することができれば、幸いこの上もない」と述べている^(注12)が、この経営診断学の研究をもって平井自身の経営学体系の完成を図ろうとしたのではないかと推察される。

おわりに

以上、平井泰太郎の学問の足跡についてみてきたが、平井経営学の大きな特徴として、経営学的考察という点と対象を方法の及ぶ限り拡大していたという点があげられる。今日、経営学研究、経営診断学研究においても対象を企業に限定しないという考えが広く普及し、浸透している点からも平井経営学の卓越していることが理解できる。

平井泰太郎は、数多くの弟子を養成し、育成した。主な弟子は次の通りである。

山下勝治、阪本安一、丹波康太郎、戸田義郎、久保田音二郎、米花稔、栗田真造、大塚俊郎、清水晶、三上富三郎、伊藤森右衛門、今井信二、市原季一、木内佳市、山榎忠恕、井上忠勝、森昭夫、鈴木和蔵、眞野脩など

以上のように数多くの経営学者と会計学者を養成し、育成したことからもわかるように、平井経営学の裾野の広さが理解できる。ただ、山本（1977）は、平井学説について、「余りにも新奇なもの、余りにも革新的なものへの興味が強くて、博士の学問は博識でありすぎ、学問的には散漫となり勝ちで、体系的とはなり得なかったほどである。けれども狙いはどこまでもドイツ的とアメリカ的との統一として経営学的に考えることであつたといえよう。然るに、この伝統が、平井門下ないし神戸大学系によって理解されず、建設的に継承され、生かされてはいないように見えるのは、博士のためにも学会のためにも遺憾というほかない」と述べている^(注13)が、平井経営学説は、平井門下の清水晶、三上富三郎の研究に色濃く反映され、特に、三上富三郎は、平井経営診断学の最大の継承者であつたと考える^(注14)。

晩年、平井が播いた「経営診断学」という種は、多くの研究者たちの手によって発展してきた。平井泰太郎が存命ならば、現在の現実に立っている我々に何を語りかけたのだろうか。

弟子で会計学者であつた今は亡き山榎忠恕は次のように語っている^(注15)。

「いささか余談めいて恐縮であるが、このような方法論の問題になると、いまからちょうど40年前、大学を出て研究室に残ったところに、恩師平井泰太郎先生から、何回となくたしなめられたさいのことが鮮明に蘇ってくる。先生は、『孔雀の羽根』をつけて得意になっているカラスの寓話を例にひき、口を酸っぱくして私共を頻りに戒められた。カラスはカラスなりに生地のままの姿のほうが美しい。肅条たる冬の野末の枯枝に身を休めているカラスの孤影には、それなりの風情がある。歌にもなれば句にもなる。みずからを侮ることなく、卑下することなく、自分自身の声で鳴くことをむしろ考えるべきだ。無官の太夫、天下ご免の野人の誇りというものが、むしろ大切ではないか。先生は、そのとき、そのように言っただけで済んだ。他の学問領域に属する研究者は、なんも経営学や会計学のために方法論を編み出してくれてるわけやないんやで。経営学や会計学を知らへん人たちの手で組み立てられた方法論が、そのままの形で、何で会計学作りに役立ちますか？会計のことは、会計に聞くほかないんや。そのとき、先生は、そうも言われた。行動科学や情報科学を知ること必要だが、そのようなものを借りてきたところで、そのことだけで会計学が高められるわけではないし、いわんや深められるわけのものでもない。他の学問における議論からの借用で会計学が成り立ちうるようなら、会計学はもともと不用のはずではないか。他の学問をもってしても、ついに解決し得ない面があればこそ、会計学がうまれたのではなかったのか、先生が今もご存命であれば、さきに紹介したような『方法論花ざかり』の最近の会計学界の状況をご覧になって、40年前と同様に、やはりそう仰言るに違いない。」

平井が存命ならば、経営診断学の研究を行なっているわれわれに、やはり「経営診断学を研究している人間たちの手で方法論を組み立てる」と述べたのではないかと思う。

最後に平井泰太郎の次の言葉を紹介することとする^(注16)。

「経営学は経済学の研究あるに拘はらず、之と相並んで独自の研究方法を持ち、人間経済生活の向上と福利との為に、自信ある歩武堂々の歩みを、強く大地にふみしめつつあるのである。その完成の為に、尚将来に於て幾多の検討が行はなければならないであろう。過去の研究は、尚幾多の再吟味を要求せられるであらう。新しき経済組織の進展と、新たなる社会関係に伴ふ新しき幾多の経済現象は、改めて其の本質が検討せられ解明せらるる必要があるであらう。何れにせよ、経営学は、之等を改めて採り上げ、新しき素材を新しき観点に立って再編成するであらう。斯くして新しき革囊に新しき美酒をなみなみと注がれて、人間経済生活の幸福の為に寄與する處があるに相違いない」

近年、経営診断の対象が拡大している。平井が存命ならば、新しき素材を新しき観点に立つて、経営診断学を再編し、人間経済生活の幸福の為に寄与すべきであると述べたと考える。

以上の、山榎が語った平井泰太郎の方法論についての考え方と平井泰太郎自身の言葉を筆者自身の今後の研究活動の糧にしたいと考える。

(注)

- (1) 三戸公「巻頭の言」経営学史学会編『日本の経営学を築いた人びと』文眞堂, 1996年, i ページ.
- (2) 古林喜楽「序文」古林喜楽・山下勝治編『経管理論と経営政策』中央経済社, 1959年 4 ページ.
- (3) 神戸大学経営学研究室『平井泰太郎経営学論集』千倉書房, 1972年, 「故 平井泰太郎博士略歴」1-3ページならびに「故 平井泰太郎博士著作目録」3-38ページより抜粋.
- (4) 平井泰太郎編『経営学事典』青林書院新社, 1964年, 15ページ.
- (5) 平井泰太郎編, 上掲書, 16ページ.
- (6) 増田正勝「平井泰太郎とドイツ経営学」『広島経済大学経済研究論集』第34巻第4号, 2012年, 7 ページ.
- (7) 古林喜楽『日本経営学史—人と学説』日本評論社, 1971年.
- (8) 平井泰太郎『経営学入門』千倉書房, 1932年.
この『経営学入門』について吉田(1992)は, 「平井教授の経営学のエッセンスはさきの『経営学入門』に凝縮されているといっても決して過言ではないであろう. 平井教授はそこで, 自らの経営学の構想と内容の原点を示しておられるからである」と述べている(吉田和夫『日本の経営学』同文館, 1992年, 89-90ページ).
- (9) 山本安次郎『日本経営学五十年—回顧と展望』東洋経済新報社, 1977年, 65ページ.
増地庸治郎と平井泰太郎は, 上田貞次郎の門下であるが, 二人の学説の違いについて, 山本は, 「増地博士があくまでドイツ経営経済学の伝統—特に経済性を指導概念とする『生産経済』すなわち『経営経済』対象とする伝統—を保守するに対して平井博士はドイツの伝統に囚われず, むしろわれわれの言葉で『経営』を考え, 広く経営の事実に取り, これを革新し超越せんとし, 経営学的考察方法に徹しようとする. 同じく経済的に考えながら, 一方は対象を限定し, 他方は方法の及ぶ限り拡大し, かくてその内容において対立する」と述べている(上掲書, 65ページ).
- (10) 平井泰太郎「総説」平井泰太郎・清水晶編『経営診断』青林書院, 1960年, 1-2ページ.
- (11) 三上富三郎『新版 現代経営診断論』同友館, 1992年, 4 ページ.
- (12) 平井泰太郎「序文」平井泰太郎・清水晶編, 前掲書, 3 ページ.
なお, 本書の章立てと担当者は次の通りである.
第1章 総説(平井泰太郎), 第2章 工場の診断(荒木東一郎), 第3章 経営立地診断(米花稔), 第4章 財務の診断(青木茂男), 第5章 人事の診断(中村勝), 第6章 生産の診断(南川利雄), 第7章 問屋の診断(原田俊夫), 第8章 小売業の診断(三上富三郎), 第9章 計数診断(中谷道達), 第10章 診断制度と診断手続(坂田武雄), 第11章 マーケティングの診断(清水晶)
- (13) 山本安次郎, 前掲書, 178-179ページ.
- (14) 三上富三郎は, 第4代日本経営診断学会会長を務め, 1994年には, 日本経営診断学会創立25周年記念事業として企画・刊行された『現代経営診断事典』(同友館)において, 編集委員長として中心的役割を演じた.
- (15) 山榎忠恕「会計学の対象と方法」『税経セミナー』VOL.30, NO.1, 404, 1985年, 17-18ページ.
- (16) 平井泰太郎『経営学入門』千倉書房, 1932年, 363ページ.

The Origin of Management Diagnosis Study in Japan: A Study on Yasutaro Hirai

SAITOU, Yasuaki

The purpose of this study is the first chairman of Japan Management Diagnosis Association, is following the footprint of study of Yasutarou Hirai who was also the first scholar who advocated management diagnosis study in our country, and there is in finding the clue which considers management diagnosis study anew.